

観光学術学会への招待

本学会は、観光研究を学問的に推進し、観光学なるものを打ち立てることを目的に創設されました。設立にあたって声を掛け合った観光研究者の勤務校がたまたま関西にあったということがあって、関西圏が中心という印象がありますが、当初から全国の観光研究者に参加していただきたいという強い意図をもっております。最初の3回の研究大会（7月）と2回の研究集会（2月）を関西で開催しましたが、今後は関東での研究大会や集会の開催を予定にしております。

本学会設立時に大きな目標として、雑誌『観光学評論』を年2回発行して、人文・社会科学の領域で十分な評価を受けられる研究論文を掲載することを掲げました。観光学の各領域における最先端の研究者が査読者としてコメントとアドバイスをする体制を整えており、論文の字数も32,000字（400字詰め原稿用紙80枚）ほどで十分に論述を展開することが可能です。会員のこれまでの努力によって外部からの評価も定着してきました。

是非、本「観光学術学会」に参加して、日本の、そして世界の観光学発展のために貢献して下さるよう希望いたします。



観光学術学会 会長
橋本 和也

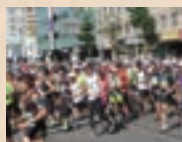
大阪大学大学院単位取得退学、博士（人間科学）。現在京都文教大学総合社会学部教授。観光学、文化人類学。著書、『観光人類学の戦略』（1999 世界思想社）、『観光経験の人類学』（2011 世界思想社）、共編著『観光開発と文化』（2003 世界思想社）



大地の芸術祭(越後妻有2015年)



神戸マラソン(2014年)



北海道マラソン(2014年)

※所属は2016年12月現在のものです

活動

観光学術学会では、観光学の学術的発展を目指し、下記の活動を行っております。

全国大会 年1回（毎年7月）開催

一般研究発表に加え、最新の観光学に関するシンポジウムやフォーラムを開催し、また次世代の観光学を担う学部生によるポスターセッション発表も行っております。

研究集会 年1回（毎年2月）開催

最新の観光学に関するシンポジウムを開催しています。

学会誌『観光学評論』発行

年1号2巻発行（毎年9月、3月）

年2回、投稿論文の募集を行い、厳正なる査読のもと、掲載をしています。また、全国大会や研究集会での発表を特集論文として掲載する他、書評も掲載しております。

その他、各種学会賞等、顕賞しています。

入会

さらなる観光学の発展を目指し、会員を募集しております。観光学術学会にご入会をお考えの方は、WEBをご確認いただき、ご入会ください。

年会費

正会員（一般）	8,000 円
正会員（大学院生）	4,000 円
準会員（学部生）	2,500 円
賛助会員	50,000 円～



観光学術学会 事務局

545-0011
大阪市阿倍野区昭和町 2-19-28
青葉グランドビル 402
(有) 地域・研究アシスト事務所 内

TEL 06-6624-1127
FAX 06-6624-0027
E-mail tourism@jsts.sc
観光学術学会 WEB サイト <http://jsts.sc>



Japan Society for
Tourism Studies

観光学術学会 への招待

アカデミックな観光研究の推進

illustrated by Yui



Japan Society for
Tourism Studies

オーストラリアのラ・トロブ大学在学時に「ロンリープラネット日本」で京都の世界遺産の数に驚いて京都に住みたくなり来日しました。それが今の研究の原点といえるかもしれません。現在は社会学やポストコロナ理論的な観点から観光研究をしています。非政治的に見えるものでも政治的な面があるというフーコー、アーリ等の考え方が興味深く、観光はこの絶好の例だと考えています。例えば、観光は異なる社会・人々と直接に出会えるきっかけになるが、異文化理解、平和に貢献するのか、しないのか？

観光学術学会に入会したことがきっかけで同様の研究をしている方々に出会うことができ、共同研究ができるようになりました。将来も皆さんと一緒に観光の「政治性」や「平和性」だけでなく、「観光」を様々な面白い観点から考察したいと思っています。



ダニエル ミルン

京都大学国際高等教育院 特定講師
専門分野：観光社会学

大学院時代には、雑誌や新聞における日本の「アイドル」の表象と受容について探ってきました。その過程で見えてきたのは、1970年代の誕生期から存在する「アイドル」の地域に根ざした物語性です。そしてそれが今の「ご当地アイドル」へと受け継がれ、人を「アイドル」がパフォーマンスを行う場へいざなう魅力となっている。現在は、こうした「アイドル」文化を活用した観光や地域振興の可能性について調査しています。

観光研究を行っていると、さまざまな土地へ出向き、そこでさまざまな人との触れ合いがあります。そのなかで、改めて自分自身や自分が生まれ育った場所について考える。そうした観光研究の醍醐味を共に感じ、享受しましょう！



田島 悠来

同志社大学創造経済研究センター特別研究員
専門分野：メディア学

私は、観光研究を企業や地域住民の視点から考察していますが、そのきっかけは、私の出身地である沖縄の観光について調べたことです。よく、沖縄観光の形成と外部環境の関連性が指摘されます。しかし、同時に、当該地域の企業が、どのように他企業と共にサービスのレベルを上げていくのか、地域住民にどのように「観光地」として生きていくのかを認識させるのかということの必要性に気がきました。

観光研究は、様々な視点から分析することが可能なため、分析枠組みの構築を難しくさせています。しかし、同時に研究者としては、「統一的な分析枠組みの構築」という野心を持つことができる研究分野です。さらに、観光学術学会という学会は、様々な研究分野の研究者がいて、刺激的な学会です。共に観光研究を世の中に発信していきましょう。



宮城 博文

大阪商業大学総合経営学部商学科 准教授
専門分野：デスティネーション・マネジメント

企業勤務の傍ら大学院での研究を再スタートしたきっかけは、過疎高齢化地域での芸術祭ボランティアでした。そこでは、地域創生が叫ばれる日本の地域がどのような現実と直面しているのかを体感し、地域に生きる人々が積み重ねてきた歴史や文化の大切さ、日本の自然の美しさを改めて見つめ直すきっかけを得ました。その時初めて、観光学という領域に足を踏み入れたのです。文系理系を越え、産学官を跨ぎ広がる観光学の学際的な広がりやその深淵さに畏敬の念を感じつつ、多様な領域の知の仲間たちが創発する場として本学会に出会えたことを嬉しく思います。人や社会、地球までも視野に入れた「まなざしGaze」の遠い地平を共有していると実感しています。



山本 曉美

東京大学大学院 情報学環 学際情報学府
文化人間情報学コース 博士課程
専門分野：社会心理学、観光学、経営学

もともと旅行をする機会が多く、日常から飛び出してどこかへ出かけることがどれだけ人生を充実させているのかを考えなくなったのが、観光研究に踏み出したきっかけです。海外であれ、県外であれ、隣町であれ、旅は距離に関係なく人々に何か大きな影響を与えているはず。現在私は、都市に住む人にとっては最も「近距離」な非日常である動物園に注目して研究を進めています。

観光学術学会には、観光産業やホテル経営等に偏ることなく、多様な視点から観光現象を捉えていらっしゃる先生が多く在籍されています。一見、私のように「それは観光なのか？」と思われがちな題材を扱っても、とても有意義なアドバイスをいただきました。自分の研究に少しでも観光の要素を見出している方は、是非一緒に観光学術学会で議論しましょう。



平 侑子

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
観光創造専攻博士後期課程
専門分野：観光社会学

これまで10年以上にわたり、東南アジアの少数民族社会などでフィールドワークを行ない、ホスト社会の人々にとって自律的な観光のあり方とは何かということを問い続けてきました。観光学術学会は、観光現象を経済的側面のみならず、政治・社会・文化など様々な視点から研究をする人たちが集まっていますので、多面的・複合的視点から観光を理解する際の様々なヒントが得られます。また、学会員の方々と交流をしていると、観光は社会を映し出す鏡であることを痛感します。観光研究の魅力とは、観光を見つめることが、結果として我々が行きている現代社会そのものを理解することにつながるという点にあるのかもしれませんが。



須永 和博

獨協大学外国語学部交流文化学科 准教授
専門分野：観光研究・文化人類学

観光学術学会の会員の皆様に、現在研究されている「観光学」について伺いました。「観光学」とひとくちに言ってもさまざまなものがあります。もしかして、これも観光学……？という方も、ぜひ、当会で観光学の研究を披露してください。

これが私の観光研究です！